遠くなった日々

「なんでこんなことになったか？おい、忘れたのかよ。まぁ、仕方ないか」

「覚えているなら教えてくれ」

「ホントに忘れたんだな……こんなこと言ってもしかたないが、お前らが原因だよ」

「俺ら？」

「お前らの些細な遊びが原因さ」

「俺らの遊び？」

「そう、お前がどっかの骨とう品屋で買ったとか言ったあれ、確か『銀の鍵』とかいうやつ」

「それをどうしたんだ？」

「そこまでは知らねーよ。ただ、あれのせいでゆがんだのかもしれないな」

「ゆがんだ？」

「ああ、俺たちが今までいた世界とほんの少しだけ」

「一体どうやってそんな中二病を証明するんだ？」

「ふはははははははは」

「何がおかしい？」

「ふふふ、いや、ついな。今俺と話していること自体が証明なのに、ほかにもいろいろと滑稽で、ふふ」

「意味が分からん」

「だってな、お前」

俺はおそらく不機嫌そうな顔をしているであろう友達に向かって言ってやった。残念ながら顔のほとんどが有刺鉄線でぐちゃぐちゃにされているせいで正しい表情はわからない。

「もう、５年前に死んだんだぜ」

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン

うとうとしている俺の耳に電車の音だけが聞こえてくる。片田舎の終電だけあって載っている人もとも少なく、首が痛いことを除けば快適？に眠れそうだ。

「あと３駅か」

大学での馬鹿騒ぎと日頃の睡眠不足のせいか耐え難い睡魔に襲ってきている。寝過ごしたら大変だと思いつつも、俺の意識は闇の中に消えていった。

「ふぁあああ」

我ながら間抜けなあくびと共に目が覚めた。電車は相変わらずガタン、ゴトンと走り続け、顔を上げた時目に入った窓の外も真っ暗で、外の景色の代わりに俺と俺の隣に座っている不思議な女の子を映しているだけだった。

「え？」

あわてて辺りを見渡しても同じ車両には俺一人しかいなかった。

「もしかして、伊賀のものか！」

くだらない冗談を言ったら一気に気分が軽くなった。念のためもう一度窓を見てみたが真っ暗で何も映していなかった。

「さて、今どこだろう？」

寝起きからあたふたしてしまったが、今一番大事なのは家に帰ることだ。誰も乗っていないってことはひょっとしたら終点に近いかもしれない。

「面倒なことになったかもなあ」

終点から家までは歩いて帰りたい距離ではない。

「あ〜あ、どうしようかな」

さっきから１人ごとをずっと言っているが、当然答えてくれる人はいなく、電車の中に空しく響くだけだった。

「誰か泊めてくれないかな？」

リュックからケータイを取り出してみると、画面に「充電してください」とだけ無慈悲に表示されていた。

「ちょっおまっなんだよこのタイミングの良さ」

ケータイをリュックに放り込んで、ふと前を見るといつの間にそこにいたのか、一人の女の子と目が合った。さっき窓に映っていた変わった女の子だ。もう寒いのに袖のない白いワンピース、まだ、年端もないのにだいぶ白髪が混じっている髪を両側でくくっていわゆるツインテールにしている。向かいの座席にちょこんと腰かけ、きょとんとした目で俺を見つめている。しかし、いちばん変わっているのは頭が首の上でなく、両手に抱え、膝の上に置いている。

「どうかしたの？」

膝の上の生首が俺に向かって声をかけてきた。どう考えても声が出せるはずないのに……

「そうだ、ダメだよ、電車の中で大きな声出しちゃ、怒られちゃうよ」

そういうと、その少女は立ち上がって近づいてきた。その腕の中の生首からおびただしい量の血があふれ、電車の中を赤黒く染め上げていく。一体どれだけ量があるのか、首から滴り落ちる血はとうとう俺の足元まで広がってきた。たまらず俺は出入り口のドアに向か

って少しずつ後ずさっていった。

「電車の中で大声出しちゃダメだし、帰りたいなら電車から降りちゃ帰れなくなるよ。電車に乗る時のお約束でしょう」

まるで幼い子供を諭すように少女の生首は語りかけてきた。その周りには底なし沼のような血だまりができている。

「マナーを守れないいけない子はね……」

すでにあの子の言っていることは耳に入ってないが、追いつかれたくない一心でドアをこじ開け外に這い出た。

「ここ、まだ駅じゃないか、電車はずっと走っていたのに……」

駅のホームには人影１つなく、無機質な電灯の明かりがあたりを照らしている。

「もう、追ってこないよな」

振り返ってみたがもうそこに電車はなくなっていた。

「なんだよこれ？」

さっきから意味が分からない……悪夢を見ているみたいだ。

「駅員に業務連絡です。北口に刺身一つ、北口に刺身一つ」

突然野太い声でそんな放送が響いてきた。

「は？刺身？なんだよ最近の駅は食堂でもやってんのかよ」

北口って確か階段上がったところだよな。

「行かない方がいいか」

自分から変なものにかかわる必要はない。

「これ以上変なことに巻き込まれる前に、どっかネカフェ見つけて、眠るとするか」

幸いこの駅の側には何軒かあるし、どこも満員なんてことはないだろう。そう思って歩き出した時、切符売り場人がいることに気が付いた。

「よかった、人がいるじゃん」

駅員すらいなくなってしまった駅の中、ぽつんと一人きりでその男は立っていた。ふつうなら怪しいと思うのだろうが、少女や放送のことを考えると人がいるだけで嬉しかった。先ほどのことは悪い夢だったと無理にでも思い込むことができるからだ。

「急ぐか」

そう言って南口向かって小走りで急いだ。

「あれ？」

突き当りを曲がったところでおかしなことになった。

「南口への階段ってここだよなぁ」

突き当りを右に行くと北口、左に行くと南口のはずだ。それなのにまた通路が続き、突き当りの右側に『北口』と記された看板がかかっている。そして、後ろを見るとそこにも『北口』と記された同じ看板がかかっていた。

「何がどうなってんだ？」

また通路を走り、突き当りを左に行くと同じような通路と、同じ『北口』の看板がかかっていた。

「北口に行くしかないのか……」

「駅員に業務連絡です。北口に刺身一つ、北口に刺身一つ」

俺の言葉に応えるようにまた同じ放送が流れてきた。

「なんだよ、刺身だってよ。何にも怖くはないね。ははっははは」

そう言いつつ、また俺は『北口』と記されていない方に進んでいた。

タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、コツ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、コツ、タッ、タッ、タッ、コツ、タッ、タッ、コツ、タッ、タッ、タッ、コツ

そうしてぐるぐる回っていると、いつのまにか自分のものではない別の足音が混ざってきた。ちらと後ろを見てみると、券売機の前いいた人影がついてきていた。俺の歩く速さより少しだけ早く、ゆっくりだが確実に距離を縮められている。相変わらず出口は『北口』しか見当たらない。

「南口どこだよー」

もう、走り出さずにいられなかった。走っている間もコツ、コツというあの足音が止むことなく聞こえてくる。走っているはずなのに足音は遠ざかることなく、むしろ近くなってきている。

「はあ、はあ、はあ」

なんとしてもどこかあの足音の聞こえないところに行きたい。

『北口』

「もう戸惑っている場合じゃないな」

俺は意を決して北口のエスカレーターに飛び込んだ。

ウィーーーン

「はぁ」

エスカレーターの駆動音を聞きながら深いため息が出た。謎の足音から逃れた安堵も、どこまでも続くエスカレーターのせいで何とも言えない不安が押し寄せてくる。前も後もほの暗い闇が広がり、俺の周りだけが蛍光灯の無機質な光のせいで不自然なほど明るい。

「まだ、続くのかよ」

「あぁぁぁぁぁぁ」

不意に断末魔の悲鳴が上から響いてきた。生まれて初めて聞く、生の、人の、悲鳴だ。

「あの声って……」

「あぁ……うあぁ……げほぉ」

か細い嗚咽と、咳するような音が絶え間なく上から響いてくる。

「何が起こっているんだよ」

そう思い、しゃがんでいるうちに、とうとう出口が見えてきた。

エスカレーターを降り、最初に目に入ってきたのは黒いシミだらけの光景だった。駅員室の扉には

『刺身準備中』

と看板が下げられていた。

「刺身一人前お持ちします」

その放送と共に駅員室の扉が開き、巨大な皿に盛られた友人が出てきた。顔は恐怖をそのまま固めたようになっていた。せめてものの救いは……内臓が取り除かれていることだろうか。

「うぼおおおおおお」

思わず、その場で、胃の中をぶちまけてしまった。

「次は丸焼き、丸焼き」

またあの声が聞こえてきた。それと同時に扉の奥から真っ黒な手術着を着た、顔のない男が這い出てきた。

「うわあああああああ」

またも情けない悲鳴をあげながら、俺は駅から飛び出した。

特にあてもなく走っていくと気が付くと大学の門の前にいた。全身汗まみれで、膝も笑っている。

「一体どうやって着いたんだ？」

地面に座り込んで休んでいると、遠くに見たことのある姿が見えてきた。両腕に大事そうに自分の頭を抱えたあの少女だ。

「いたぁぁ」

にこりっと俺を見つけると嬉しそうに無邪気に笑った。

「なんでこうなるかな」

半ばあきらめに近い思いを抱きながら、俺は大学の構内に逃げ込んだ。

「こういう怪奇現象で建物の中に逃げるって絶対にいい結果産まないよな」

自嘲めいたギャグを言っても全く気が晴れない。

「今更だけど、どうしてサークル棟のドアの鍵開いてたんだろ」

もしかしたら罠にはめられたかもしれないという考えが脳裏によぎった。

「だとしたら俺は袋のネズミか。ハハハ……」

力のない笑いが階段に響いた。

「丸焼きはゴメンだな」

キィーーー、ガタン

その時、扉から誰かが入ってくる音が聞こえてきた。

「別の建物もあるのに、どうしてここに来るかな」

俺は３階の非常口を目指し、歩き出した。靴を脱ぎ、足音を立てないように慎重に進む。

ガチャ、ガチャ

「おい、なんで開かないんだ？ベタすぎるだろこんなの！」

カツン、カツン

背後から不自然なほど大きく足音が聞こえてくる。ふと足元を見ると、血が川のように流れてきて沼のようになっていた。

「ひい」

追いつかれたくない一心で一番近くの階段を駆け上がった。４階、このサークル棟の最上階だ。

「本格的に袋のネズミになって来たな」

もう足音は聞こえてこない。しかし、どこの階段に潜んでいるのかもわからない。

「どうしたものかな」

全ての階段を覗き込んでみたがどの階段にも誰かが潜んでいる気がしてならない。そのせいで動くことができず、４階の廊下を右往左往している。

「疲れたよ」

追い詰められた、という感覚が俺の精神力をむしばんでいく。

「はあ」

重いため息とともに、とうとう座り込んでしまった。

「来るなら来いよ。絶対い、にっ逃げないっての」

精一杯強がってみるが強がりにもまともに言えなくなってきていた。

「この位置ならどの階段にも逃げ込めるんだよ。壁も背にしてるから背後も取らせねえよ」

ポタリ

その時、俺の顔に水滴が落ちてきた。

「うひぁぁぁ」

いい年して思わず飛び上がってしまった。見上げた時、差し込んだ月明かりが辺りを薄く照らし出した。

少女の首が、髪を窓枠に結び付け、ぶら下がっていた。

「来いっていうから、嬉しいな、私に会いに来てほしかったの？」

ゴトン

結んでいた髪がほどけ、少女の生首が俺の前に落ちてきた。

ズルリ、ズッ、ズルル

階段の方から何かを引きずる音がした。振り向くと首からの体が階段を這い上がってきていた。ぎこちない動きをしながらこちら近づいてくる。

「今なら」

小走りながらも俺はその場を離れた。

「どこにいくの？」

お前らみたなのがいないところだよ。

「おいおい、嘘だろ」

２階から１階の階段は防火扉で閉ざされていた。

「しかも全く動かない」

カツン、カツン

そうこうしているとまたあいつの足音が響いてきた。

「おい、こっちだ」

背後から聞きなれた声が聞こえた。

「お前……どうして？」

「いいから」

その友達は俺の襟首をつかむと近くの部室に連れ込んだ。

ヒュー、ヒュー

狭い隙間から空気の漏れる音が聞こえてくる。

「お前生きていたのか」

「うん？ああ、一応生きてはいるか」

「一応？」

「今はそんなことはどうでもいい」

ぎりっと音がしそうなほど俺の肩をつかんできた。

「いいか、俺の言うことをよく聞けよ」

「おう」

「うちの部室に今日使った悪ふざけの道具が残っている」

「あの、変な道具か？」

「それだ。それを破壊すればきっとこの変な悪夢も覚めるかもしれない」

「破壊って、どうやって？」

「知らねえよ、火でも使って燃やせばいいだろう」

「燃やすって簡単に言うけど」

「オレのポケットのライターとそこの石油ストーブの中に灯油が余っているだろう。それをタオルに浸して火をつけろ」

「いいのか？それ」

「ここで死にてえか？」

「……」

俺は意を決してタオルに灯油をしみこませた。

「お前もいくだろ？」

「行けねえよ」

「なぜだ？」

友達は携帯の明かりで自分の姿を照らしだした。

全身を有刺鉄線で貫かれ、不気味な人形のようになっていた。ヒューという音は鉄線に貫かれた喉から聞こえてくる音だった。

「うわあああああああああああああああああああ」

今見た光景を忘れるため、そしてこの悪夢を終わらせるため、俺は全力で走り出した。無我夢中で部室に駆け込み、タオルに火をつけ部屋の真ん中にある机にそれをたたきつけた。

「ははは、これで終わりか」

徐々に視界がかすみ、焦点が合わなくなってきた。

「はあ」

大きなため息をついた後、俺の意識は消えてしまった。

気が付くと真っ暗な部室にいた。焦げ臭い香りこそするが、火事になった後もない。

「終わった？」

念のため建物の中を詳しく調べたが有刺鉄線で貫かれた死体も、血だまりも何もなく広々とした校舎だけが広がっていた。

「終わったーーーーーーー」

もう帰る気力すらない俺は少しでも休むため部室を目指した。扉を開けたその時、がしっと誰かが腰に抱き着いてきた。

「つかまえたぁ」

床の上から見覚えのある首が俺を見上げていた。

「というわけさ」

「誰と話しているの？」

ベッドの下から生首が転がり出てきた。あの日以来毎日見てきた女の子の首だ。

「誰もいないよ。私とお兄ちゃん以外」

「これは夢これは夢これは……」

「ぶつぶつと何を言っているの？」

俺は努めて聞こえる声を無視した。あれを受け入れるともう元の日常に戻れない気がするからだ。

「変なの、おやすみ」

そう言ってまた生首はベッドの下にもぐっていった。

「明日こそ目が覚めますように」

心から祈りながら、俺はまたまぶたを閉じた。

Fin